

ジャズ・アーティストによるモーツァルト集は、大きく三つに分けられる。一つは、クラシックの演奏家のようにジャズ・ピアニストが原曲(譜面)に忠実に演奏すること。もう一つは、ジャズの題材として取りあげてテーマ演奏～アドリブを行なうことで、この場合はテーマとアドリブのバランスが大体同じか、あるいは原曲に依拠している。さらに、もう一つは、ジャズの題材としながらも、より自由度の高いアレンジとアドリブを行ない再創造することで、こちらはアドリブが主体だ。ロマンティック・ジャズ・トリオのこの『ジャズ・モーツァルト』は、三つめのモーツァルト集である。

ロマンティック・ジャズ・トリオが取りあげたのは、日本人によく知られた有名曲ばかりというわけではない。実質上リーダーのピアニスト、ジョン・ディ・マルティーノの考えるモーツァルトの名曲、そしてジャズへのアダブテーションに適した楽曲が選曲されている。また、いずれのナンバーも原曲のメロディーが踏襲されているが、大胆なアレンジが成されたナンバーもあり、モーツァルトに詳しい音楽ファンでないと、どの作品が原曲なのか、おそらくわからない曲もあるだろう。たとえば、誰でも知っている9曲目「交響曲第40番」のあのメロディーが出てくると、モーツァルト集であることを実感できるわけだが、全体的にはまるでジャズのオリジナル曲集のようにも聴こえるアルバムである。逆にクラシックのファンが聴けば、ジャズがどういう音楽なのかとてもわかりやすいだろう。それだけマルティーノの選曲のセンス、ジャズ・アレンジ、演奏が素晴らしいということになる。それにしても、クラシックの楽曲は曲名がやっかい。メロディーを知っていても、「ピアノ協奏曲第21番」「交響曲第40番」ではおぼえにくいものだ。クラシックのファンならそうでもないかもしれないが。

ロマンティック・ジャズ・トリオのメンバーは、ピアノのジョン・ディ・マルティーノ、ベースのボリス・コズロフ、ドラムのエルネスト・シンプソン。このアルバム『ジャズ・モーツァルト』は、このトリオの通算4枚目の作品である。これまで、スタンダード・ソング集の『甘い調べ』(2004年)と『ソー・イン・ラブ』(2005年)、ミュージカルの新しい名曲にスポットを当てた『ミュージック・オブ・ザ・ナイト』(2006年)をリリースしている。ベースとドラムは交替しているが、ベースのコズロフは前作にも参加。ドラムのシンプソンは初参加。コズロフはモスクワ出身、1995年からニューヨークで活躍中。シンプソンはキューバ出身で、ウイントン・マルサリス、パキート、ハービー・ハンコック、サリフ・ケイタなど多彩なアーティストと共演。今年2月にはリチャード・ボナ・バンドで来日して注目を浴びている。

順序が逆になったが、フィラデルフィア出身のジョン・ディ・マルティーノは、非常に多彩な音楽の造詣をもつ。ジャズの楽理や作曲などをレニー・トリスターノとジョン・セベスキーに学んでおり、マルティーノがクリエイティブなジャズを志向しているのもうなづける。また、彼はジャズ教師としても活躍している。この最新アルバムを聴けば、モーツァルトへの造詣も深く、冒険心や探究心の豊かなアーテ

Jazz Mozart

ジャズ・モーツァルト

John Di Martino's Romantic Jazz Trio

ロマンティック・ジャズ・トリオ

- ザ・ファイヤー・オブ・パッション～ピアノ協奏曲第24番「アレグロ」**より The Fire of Passion ~ Piano Concerto #24 in C minor K491(4：57)
- バラの花びらのように～ピアノ協奏曲第21番「アンダンテ」**より Soft , Like The Petals Of A Rose ~ Piano Concerto #21 in C major K467(4：47)
- デザート・ジャーニー(オマージュ・ア・モーツァルト)** Desert Journey ~ Homage A Mozart(John Di Martino)(5：59)
- アイブ・ロスト・ハー～オペラ「フィガロの結婚」**より I've Lost Her ~ The Marriage Of Figaro K492(5：53)
- 幻想曲二短調**より Fantasy in D minor K397(5：27)
- マイ・ハート・ニーズ・トゥ・ノウ～ピアノ協奏曲第27番「ラルゲット」**より My Heart Needs To Know ~ Piano Concerto #27 in B flat major K595(5：14)
- ラクリモサ～レクイエム**より Lacrymosa ~ Requiem K694(5：56)
- ザ・ウィローズ・ソング～クラリネット協奏曲「アダージョ」**より The Willows Song ~ Concerto for Clarinet and Orchestra in A major K622(4：28)
- ダンス・オブ・ザ・ウインド～交響曲第40番「モルト・アレグロ」**より Dance Of The Wind ~ Symphony #40 in G minor K550(4：28)
- アーク・オブ・ラブ～ピアノ協奏曲第23番「アダージョ」**より Arc Of Love ~ Piano Concerto #23 in A major K488(5：28) all songs by W. A. Mozart (Except 3)

ジョン・ディ・マルティーノ John Di Martino (piano)
ボリス・コズロフ Boris Kozlov (bass)
エルネスト・シンプソン Ernesto Simpson (drums)
録音：2006年3月27, 28日 ザ・スタジオ、ニューヨーク

©© 2006 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

*

Produced by Tetsuo Hara & Todd Barkan
Recorded at The Studio in New York on March 27 & 28 , 2006
Engineered by Katherine Miller
Mixed and Masterd by Venus Hyper Magnum Sound：Shuji Kitamura and Tetsuo Hara
Front Cover: (c) Bettmann / Corbis
Artist Photos by Mary Jane
Designed by Taz

リストであることもわかる。

なお、収録曲には「ザ・ファイヤー・オブ・パッション」「アイブ・ロスト・ハー」など、モーツァルトの原曲にはない曲名が付されているが、これはモーツァルトの原曲を元にして変奏、発展、再創造させたジャズであることから、新たな曲名を付したものである。

- ザ・ファイヤー・オブ・パッション～ピアノ協奏曲第24番「アレグロ」**より
モーツァルトはほとんどどの作品を長調で作曲した。「ピアノ協奏曲第24番八短調」はモーツァルトにとっては珍しい短調の曲。“ ベートーヴェンの ” な作品ともいわれる情熱的な楽曲である。ロマンティック・ジャズ・トリオの演奏は、第1楽章「アレグロ」の主題をベーストが中心になって演奏する構成で始まる。
- バラの花びらのように～ピアノ協奏曲第21番「アンダンテ」**より
八長調で作曲された優雅で明るい楽曲。ポピュラー・ミュージックのような親しみやすさがあるので、ジャズ・アレンジも比較的行ないやすい曲だろう。ここでは、有名な第2楽章「アンダンテ」へ長調を悲哀をふくむスロー・ナンバーに変えて演奏される。
- デザート・ジャーニー(オマージュ・ア・モーツァルト)**
モーツァルトへ捧げられたジョンのオリジナル・ナンバー。35歳の

若さで世を去った天才モーツァルトが歩んだ短くも美しい、そして砂漠のようでもあった人生の旅が繰られる。

- アイブ・ロスト・ハー～オペラ「フィガロの結婚」**より
貴族社会を諷刺したフランスの劇作家ボーマルシェの喜劇を題材にして、モーツァルトが作曲したオペラ。台本はロレンツォ・ダ・ポンテが書いた。ここでは、第4幕第23曲バルバリーナのカヴァティーナ「失くしてしまったの…困ったわ！」が取りあげられている。伯爵から手紙のピンをスザンナに渡すように言われたバルバリーナが、そのピンを落としてしまい途方に暮れている場面の曲だ。

5. 幻想曲二短調

この「幻想曲二短調」は未完の楽曲で、自由な構成と即興性をもっている。ロマンティック・ジャズ・トリオの演奏は、アドリブ・パートはもちろんテーマ部においてもまるでジャズ・ナンバーを取りあげたように自然に聴こえる。

6. **マイ・ハート・ニーズ・トゥ・ノウ～ピアノ協奏曲第27番「ラルゲット」**より

モーツァルトが死去する年に書かれた最後のピアノ協奏曲。「ラルゲット」は第2楽章の変ホ長調で、長調ながらも哀感をたたえ、澄みきった透明な響きがある。ジョン・ディ・マルティーノのピアノ演奏は、原曲のイメージを大切にしながら、アドリブでは大胆なジャズ・アプローチへ発展させている。

7. **ラクリモサ～レクイエム**より

モーツァルトの最後の作品「レクイエム」は、未完のまま残されて、死後に彼の弟子による補筆で完成された。モーツァルトはこの「ラクリモサ」(涙の日)の8小節までを書き上げて絶筆したといわれる。美しくも哀しい曲だ。「レクイエム」

は死の世界からの使者の依頼で、モーツァルト自身のために作曲したという伝説が流布されていたが、1964年に依頼者がフランツ・フォン・ヴァルゼック伯爵であることが判明した。

8. **ザ・ウィローズ・ソング～クラリネット協奏曲「アダージョ」**より
モーツァルトが残した貴重なクラリネットのための長調協奏曲で、傑作の誉れが高い人気曲だ。ウィーン宮廷楽団に仕えていたクラリネットの名手シュタードラーのために作曲された。ここでは第2楽章アダージョが演奏される。原曲のイメージを広げるジョン・ディ・マルティーノのイマジナティブな演奏が印象的だ。

9. **ダンス・オブ・ザ・ウインド～交響曲第40番「モルト・アレグロ」**より

最も有名なモーツァルトの楽曲のひとつ。このト短調交響曲は第39番、第41番とともに三大交響曲といわれる。ロマンティック・ジャズ・トリオの演奏は、第一楽章の有名なメロディーを元にして変奏曲的な展開をみせる。

10. **アーク・オブ・ラブ～ピアノ協奏曲第23番「アダージョ」**より
一般的によく知られている長調協奏曲で、シンプルな構成の楽曲だ。この「アダージョ」は第2楽章で、嬰へ短調の6 / 8拍子で書かれている。ここでは素晴らしいジャズ・バージョンに変換されている。

(高井信成)